

「チェルノブイリ」への旅

後編

日立市 佐竹 光生

前篇では「チェルノブイリ」への旅は、成田～モスクワ、ベラルーシのミンスク～ホイニキ～ゴメリ、ウクライナのスラブチッチまで来ました。そこでスラブチッチのおさらいをしてみます。本稿の内容はすべて2006年の出来事です。

スラブチッチはチェルノブイリ原発で働く人たちのために、原発事故後半径30km 圏外に作られた町で、ウクライナで一番新しい町です。人口は25,000人ほどで、平均年齢は29歳と非常に若いのが特徴です。原発で働く人たちの給与はウクライナの一般の労働者の4～5倍と、高給だそうです。家族持ちの労働者の住居は140平方メートルほどで、一見コテージ風の一軒家になっていて低家賃です。

チェルノブイリへ

今日は日本を出てから6日目の9月1日です。旅の疲労もピーク状態が続いています。

朝、ホテルを出てバスでスラブチッチの駅へ向かいます。この駅から電車でチェルノブイリ原発のもよりの駅(後で調べてわかったのですがヤノフ駅と言うようです)へ出かけるのです。車窓にはドニエプル川の形成した低湿地帯で、小さな河川や沼沢が続きます。木々は灌木で蘆のような草木も目立ちます。要するに河川敷のような状況です。時おり、人がいるのかどうか分かりませんが、住居や工場も見受けられます。



写真1 チェルノブイリ原発の遠景

見学上の注意

車内では原発への案内人が、チェルノブイリ原発の見学上の注意事項を教えてくださいました。この人はチェルノブイリ原発で働いていましたが事故後退職して、現在はスラブチッチで観光会社を営んでいるとのこと。

その注意とは 路上や土の上、机上にものを置かない 職員や守衛を写真にとってはいけない 安全装置などの写真撮影もダメ 用足しの前に手を洗うこと(もちろんその後) などです。これらは至るところに残留放射性物質(放射能)があるから、充分注意しなさいということでしょう。もっとも写真撮影はほとんど自由に出来ました。

ヤノフ駅



図1 チェルノブイリ原発周辺図

そうこうしているうちに電車はヤノフ駅に着きました。スラブチッチの駅からおよそ45分です。途中には一つも駅は無かったように思います。

ここで第一の検問を受けました。何を測るのかわかりませんが、各人固有の自然放射線量を検査するのだと思います。ばんざいの形をとり、両手を機械の端子に触れる。OKであればブザーが鳴る。なかなか鳴らない。何度目かでやっとOKが出ました。

駅を出て原発専用のバスでチェルノブイリ原発へ向かいます。このバスには同じ電車に乗ってきた原発労働者も同乗します。私たち調査団がバスに同乗させてもらったというのが正解かもしれませんが。原発へは5分ほどで到着します。労働者のなかには駅から徒歩や自転車通勤の人もあります。

チェルノブイリ事情

旧ソ連では、原子力発電所とその施設(都市)は何も無い所に建設しました。そしてその都市は秘密扱いとして、地図にも記載させなかったようです。アメリカのスパイ衛星が24時間監視していて秘密扱いは意味がないはずですが、国民にはあくまで秘密で外国には内緒にしたかったのでしょう。

チェルノブイリ原発はドニエプル川の支流の川の河畔に建設されました。これがチェルノブイリ市で、爆発事故当時にはおよそ10万人が生活していました。居住禁止にもかかわらず、現在でも数百人が暮らしているようです。これらの人々は高齢者が多く一旦は汚染地域の外に移住したものの、新しい生活になじめず再び故郷に戻ったのです。

チェルノブイリ市と鉄道を隔てた反対側に原発従業員のための都市、プリピャチ市が建設されました。最盛期には人口5万人を数えたということです。

両市とも高レベル放射性廃棄物のため強制疎開させられ、爆発事故後一夜(実際には数日間)にしてゴースタウンと化したのです。現在でも居住禁止で、人の立ち入りは厳しく制限されています。

チェルノブイリ原発・・・その1

専用バスを降り、4号炉にほど近いチェルノブイリ発電所全体の4階建ての管理事務所に向いました。玄関をくぐると、ヤノフ駅で受けたのと同じ機械でまた検問を受ました。その後展示室で全体的な説明を受けましたが、その話しは後回しにして爆発した原発4号炉の話しをしましょう。

この4号炉は現在「石棺」と呼ばれています。つまり生命力を失った原発という遺体を入れた石製のひつぎということです。



写真2 爆発直後のチェルノブイリ原発4号機

石棺について

やや黒ずんだコンクリートの荒肌の壁面が鈍く輝いた、巨大な構造物が見えます。その壁はコンクリートのパネルを1枚1枚埋め込んだかのようなのです。この巨大な構造物は高さ60メートル、縦横70メートルあるといひます。これが爆発したチェルノブイリ原発4号機なのです。



写真3 チェルノブイリ原発4号機の外観



写真4 チェルノブイリ原発4号機の外観

「これが石棺か。写真やテレビで見て知ってはいたが、何かイメージが違う。鎮魂と慰霊の場所ではない。これは20世紀の人類の産物、原子力と原発の巨大な墓場なのだ。チェルノブイリは原発の墓場だ。」これが私の新しい理解となりました。

この巨大な構造物の後ろには高さが2倍近い煙突がたたずみ、右横には天秤のように片側に大きな板の荷を抱えた、煙突と同じくらいの高さの自立式クレーンが構造物を見下ろしています。そして高さ2メートルくらいのコンクリートのフェンスが回りを取り囲んでいて、フェンスの内外には作業員の姿も見えます。構造物の左側には何があったのか思い出せません。

私は巨大な構造物の壁まで100メートルくらいと見当をつけましたが、150メートルはあるという人もおり、300メートルと書かれた文書も見ることがあります。

チェルノブイリ発電所全体の4階建ての管理事務所に向った私たち調査団は、玄関をくぐるとヤノフ駅で受けたのと同じ機械でまた検問を受ました。その後は原発特有の防護衣服に着替えるのかと思いましたが、そのような事はありませんでした。検問を通過すると次に2階の展示室に案内され、全体的な説明を受けましたが、

チェルノブイリ発電所の全体説明

そこにはチェルノブイリ原子力発電所全体のミニチュア模型(縦横それぞれ3メートルはあろうかと思われる)と発電機全体の模型(長さ3メートルくらいか)が展示してあります。チェルノブイリ原発には1～4号機があり、さらに5・6号機が建設中であったとのことです。事故を起こした4号機は電気出力100万kw(キロワット)です。模型から見ると3・5・6号機は4号機と同じような大きさで、1・2号機は少し小さいように見え、とにかく広さも出力も巨大な発電所でした。



写真5 チェルノブイリ原発の模型

係員の説明

模型を前に係員(若い男性)が説明を始めました。専門の担当のせいか手馴れた様子です。係員の説明は以下の様でした。

5・6号機が完成すれば、チェルノブイリ原発はヨーロッパで最大の原子力発電所になるはずであった。ところが4号機で1986年4月26日爆発事故が起きてしまった。

4号機と3号機は発電所の建屋がつながっており境目は壁で仕切られてだけのため、汚染が広がった。

4号機ほかチェルノブイリの原発は黒鉛減速型原子炉という、格納容器のない原子炉である。この形式の原子炉は核燃料を交換する際に、原子炉を停止する必要がないという。

この事故のためウクライナでは現在この形式の原子炉は使用していない。チェルノブイリ原発は4号機ほか、すべての原子炉は使用をやめ発電はしていない。つまり廃炉したということ。

廃炉したが発電所全体で21,000カセット分の核燃料が残っているため、現在核燃料貯蔵庫を増設中とのことである。

ウクライナには現在原子力発電所が4ヶ所にあり、15基が稼働している。最大の原発はサハロウスカヤで、6基の原発がある。ウクライナでは電力の50%を原発に頼っている。かつてチェルノブイリの原発は旧ソ連全体の電力の5%をまかっていた。

チェルノブイリでは核燃料と核廃棄物があるため、100年間つまりあと80年は原発を管理していかなければならないとのこと。短期間で放射線による汚染を処理する方法はない。現在従業員は約3,800人いる。もともと5,000人でチェルノブイリの原発は稼働していた。

現在空気中の放射線量は1時間当たり、チェルノブイリ原発で70マイクロレントゲン、キエフで10

マイクロレントゲン、スラブチッチで20マイクロレントゲンである。この数値が許容値とどのような関係にあるのかは説明がなかった。

2階の展示室でチェルノブイリ原発の全般的説明を受けたあと、私たち調査団は石棺と呼ばれる4号機に一番近い別棟の展望室に向いました。日本を発って6日目、事務所と展望室が同じ建屋であったか別棟であったか分からなくなるほど疲れてきました。

石棺の展望室

そこは比較的小さな部屋でしたが私たち調査団を受け入れるには十分で、20人は入れるようでした。といっても立ってでの話しです。窓にはブラインドが降ろされていますが外は晴天で、昼過ぎの日ざしが差し込んできます。壁にはほぼ全面にチェルノブイリ原発事故に関する写真や説明表が掲げられていて、その上には20数カ国の国旗が掲示してあります。セキュリティーのため外部の写真撮影は禁止とのことでしたが、係員は一人ですから黙ってやれば撮影は出来そうでした。

部屋の中央には4号機原子炉の精巧な模型が置いてあります。幅・奥行き・高さはそれぞれ1メートルはあろうかと思われます。事故当時の状況を示すように、建屋とともに原子炉の内部構造がよく判るようにしてあります。



写真6 爆発したチェルノブイリ原発の模型



写真7 爆発した原発模型の上部

係員の説明

精巧な模型を前にして女性の係員が熱っぽく、以下の説明をしてくれました。

爆発した4号機原子炉から放射性物質の飛散を防止するため、原子炉全体をコンクリートで覆うようにした。

この石棺と呼ばれるコンクリート構造物は、軍隊やリクビダートルと言われる労働者を多数動員して260日間で完成させた。石棺の建設作業は産業用ロボットなどを使用した遠隔操作も利用した。遠隔操作は作業員の被爆を少なくしたが、精密な作業は出来なかった。建設は6月から始まったということなので、石棺は11月頃に完成したことになる。この建設作業で1000人の死者が出たという。

正確で精巧な石棺が出来なかったことや放射線の影響で、構造の状態が非常に悪化してきている。屋根や壁のコンクリートの重量の影響で、建屋の柱も曲がりが大きくなった。石棺の寿命は30年と言われるが、安定化のための補修作業を続けている。

原子炉の爆発の影響で、炉の上部にある重量200トン以上もある半球状の防護蓋(格納容器の屋根と訳されていたが、もともと格納容器はない)が、90度垂直に回転移動した。また1000トンとも2000トンいわれる建屋の屋根や壁が、吹き飛んだり落下したという。

30km圏内で60万人が疎開させられた。爆発後の8日間ではよう素の放射線の影響が一番大きかった。8年後の92年(年数が矛盾している)の調査によると、4000人が甲状腺ガンにかかっていることが分かった。小さな子供や青少年への影響が大きい。破壊された原子炉が住民に脅威を与え続けている。

爆発後の10日間原子炉の温度が1000度に達した。通常は600度程度らしい。現在の核燃料の温度は40 になっているとのこと。

現在炉内にどれだけの核燃料が残っているのかわからない。少なく見積っても2000トンはあるという。

原子炉の内部の管理。25%は管理可能だが高レベルの放射線により75%は管理不能とのこと。

チェルノブイリ原発・・・その2

前にも述べましたが、チェルノブイリ原発4号炉は石棺と呼ばれるコンクリート構造物で覆われています。強い放射線を浴びつづけ老朽化した石棺を被いかぶせるための第2の石棺として、シェルターが計画されているということです。

第2の石棺 (シェルター)

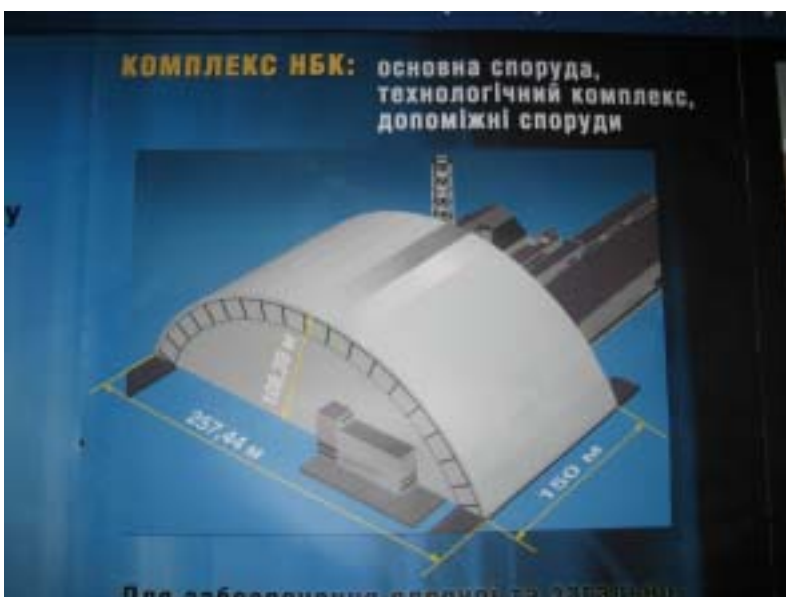


写真8 シェルターの構想図 (展望室の掲表から)

1) 2004年から計画がスタートして、昨年で80%まで計画が進行しているといえます。07年度からシェルターの製造を開始して、10年には完成の予定とのこと。もう建設が開始されていると思われませんが、建設費は1000億円以上といわれています。ウクライナだけでは資金不足のため、日本を含めた国際協力により資金援助されるということです。

2) このため現在の石棺の安定強化作業は06年12月で終了するとのこと。シェルターが完

成したら旧石棺の可能な部分と、内部の放射性物質は撤去されます。このために、新シェルターの内部には各種作業用の自動装置が設置されるのでしょう。

- 3) 展望室の掲表によると、シェルターの大きさは高さ(半径方向)108メートル幅257メートル奥行き150メートルのかまぼこ形で、レール上を走行する開閉式とのことです。建設作業は作業員の被爆を避けるため、石棺から離れた場所で行います。シェルターはレールを利用して現在の石棺の場所まで運ばれるようです。
- 4) 重量は明示されていませんが概算すると、厚みが1メートルのコンクリートとして最低でも25万トン程度になると思われます。実際にはこの2～3倍にはなるでしょう。史上最大の可動式構造物の誕生となります。

説明を聞いての感想

- 1) チェルノブイリ原発4号機がなぜ爆発して炎上しそれをどのようにして消火し、さらに放射性物質の発生と飛散を抑えたかの説明はなかったように思います。説明の時間が限られているのは確かですが、私たちとしては興味のあるところでした。すでに詳細が公開されているから必要ないと言えるかも知ませんが、忌まわしい過去(あえていうと国の恥)は何度も口にしたくないともいえると思います。それにしても担当者は熱心に説明してくれました。
- 2) リクビダートルであったバスの運転手の話から爆発事故の直接原因は、原子炉そのものではなく発電のためのタービンの試験作業であったことを知りました。その廃炉になった原発を100年は管理しなければならないとのことです。原発は1度重大事故を起こしたらおしまいです。だから絶対に事故を起こしてはならないと、改めて強く感じました。
- 3) ウクライナもベラルーシも国の経済財政状況から、単独では爆発後遺症のすべての対策は十分には出来ないことが解りました。この面でも一層の国際協力と援助が望まれているのです。

プリピャチ 無人の町

石棺展望室での見学を終えた私たち調査団が次に向かったのは、チェルノブイリ原発に隣接したプリピャチ市でした。20年前に一夜にしてゴースタウンとなり今は無人の町プリピャチですが、許可なしには立入りは出来ません。そこへ原発専用バスで乗り込みます。



写真9 廃墟になったプリピャチの町

チェルノブイリ原発から5分、プリピャチの町はうっそうと覆われた林の中にもありました。地域の名前は分かりませんが、そこにはマーケット・劇場・ホテルなど人々が集う施設があり、高層アパート・幼稚園・学校など人々が暮らす場所が確かにありました。だがそこには20年前の人々の賑わいはありません。何ごともしなかったかのように静寂そのものでした。時間を感じさせるのはいくぶん朽ちかけてきた建物だけでした。

所々の建物の外壁にイラストらしい絵が描かれています。落書きではありません。画学生のグループが許可をえて描いた鎮魂のための絵画だ

ということです。

私たち調査団はその建物のいくつかの内部に入ってみました。内部は足の踏み場もないほどに乱雑になっていました。多くの人々が家庭と住居と地域を捨てあわだしく避難していったことが窺えます。ある家庭であった場所には子供が使ったであろう人形や教科書や楽器などが転がっていました。見た限りでは大形の家具類はほとんど残っていません。どうしたのでしょうか、大形の家具類はとても持って避難出来るとは考えられません。台所や風呂場の設備は置き去りのようです。軍隊も何度も点検して回ったとのこと。



写真10 建物に残る画学生の描いたイラスト

地震や風水害と違い家庭や地域には何の変化もないのにも拘らず、5万人を超える人々が1000台以上のバスで、プリピャチの町を捨てて逃げて行かざるをえなかったのです。ここに自然災害と異なった、原子力による放射線災害の恐ろしさがあります。

チェルノブイリ原発の裏側



写真11 チェルノブイリ原発4号機の裏側

プリピャチの町の廃墟を見学した私たちはバスで再びチェルノブイリ原発へ向いました。原発の構内道路なのかよく分かりませんが、行きとは別の道路で原発に戻りました。ほぼ全体の半周にわたり、先に見学したのとは違う原発を見ました。先のを表側とすれば今度は裏側になります。普段報道などでお目にかかるのは表側ですが、裏側はまた違った趣があり、受変電設備など各種も設備も見えます。

石棺食堂

管理事務所に戻った私たちは2階の従業員用の食堂に案内されました。遅い昼食になります。一般の見学者でも予約しておけば食べられるとのこと。この食堂は見学者から「石棺食堂」と呼ばれ、なかなかの評判になっているそうです。この日のメニューは、一皿の野菜つき肉料理とパンそれにジュースでした。今回の旅ではどこの食事でも野菜が少ないように思いました。

チェルノブイリからキエフへ

「石棺食堂」で遅い昼食をとってチェルノブイリ原発の見学は終了です。これからはスラブチッチのホテルに戻り、それからバスでウクライナの首都キエフへ向います。

チェルノブイリ原発のあれこれ

チェルノブイリ原発にも、爆発事故とその処理対策時の犠牲者の慰霊のモニュメントがあります。スラブチッチと同様に私たち調査団も慰霊碑を参拝しました。ここには亡くなった方のネームプレートが掲示されています。その数30枚。スラブチッチでは31名の方のレリーフが掲げられていました。この違いは何だろうと、調査団の中で話題になりました。



写真12 チェルノブイリ原発爆発事故の犠牲者慰霊モニュメント

チェルノブイリには、放射性物質で高度に汚染された森林をなぎ倒して深さ1メートルの土で埋めた場所や、事故対策に使用した大量の土木建設機械や機材を整理して放置した場所があると聞いています。これらが見学出来なかったのは残念でした。

帰りのヤノフ駅でまた検問があります。行きの時と違って私はスムーズにOKが出ました。ところが調査団の一人はなかなかOKのブザーが鳴りません。係員がやって来て調べてみましたがダメです。靴底が怪しいとにらんで、水で洗って再度検問しましたがやっぱりダメです。これを繰り返しましたがOKが出ません。業を煮やす係員は「もういい、通れ」と言ったかは分かりませんが、検問をパスしてくれました。

私はこれを見て「チェルノブイリには基準値を超える残留放射性物質が存在するのだ」と、改めて感じました。

キエフへ

私たち調査団はホテルで小休止した後、ウクライナの首都キエフへ向いました。3時間の専用バスの旅ですが、ミンスクからスラブチッチへの時間の半分以下です。キエフはウクライナの首都でありキエフ州の州都でもあります。チェルノブイリもキエフ州に属しています。

窓の外の風景はベラルーシと同じく大森林と大草原が続きますが、その規模が一層大きくなりました。

途中でドライブインに立ち寄り休憩しました。店は1軒しかありませんが、今回のバスの旅では初めてのドライブインです。店はレストランが中心ですが、もちろんお土産も販売しています。

キエフに近づくまで自然の風景だけで殆ど何もありません。郊外には20階建てくらいの高層アパートが目立ちます。二つの大きな川(どちらもドニエプル川だと思いましたが)を渡るとキエフの市内になります。

ドニエプル川



図2 ウクライナの所在図

ドニエプル川はヨーロッパにおいて、ボルガ川やドナウ川に次ぐ大河です。全長2,285kmでキエフ周辺の水深は29メートル、横幅は400メートルもあるということです。大きな観光船も浮かんでいます。貨物船も通行しているのかも知れません。スカンジナビアからビザンティン帝国までを結ぶ、通商路となっていたようです。キエフはドニエプル川畔に都市を形成して、地理的条件を背景に政治・経済の中心地になっていったとことです。

キエフの1日…その1

ウクライナは第一次と第二次の世界大戦でヨーロッパでの主戦場となった国です。第二次世界大戦ではウクライナの人口の1/4が犠牲になりました。おそらく500万人前後が犠牲になったと思われます。ウクライナの首都キエフでは1941年9月19日にドイツ軍が占領し、1943年11月に撤退するまで占領が続きました。2年間のドイツ軍の占領により、キエフの市民の20万人以上が死亡し、10万人以上が強制労働者としてドイツに連行追されたそうです。第二次大戦は甚大な損害をもたらしましたが、現在キエフの人口は約300万人に復興し発展しています。

ディナモ・キエフの悲劇

世界中にはディナモという名のサッカーチームはいくつかあります。本来ディナモとはダイナモのことで意味は発電機のことです。その中でキエフのディナモがヨーロッパの強豪で世界的に有名です。旧ソ連時代にはそのナショナルチームのメンバーの多くは、キエフの選手が占めていたそうです。もちろんキエフのディナモはウクライナ最強です。

キエフがナチス・ドイツの占領時代に行われたサッカーの試合は、「死をかけたトーナメント」と言われウクライナの人々の記憶に残っているそうです。「勝ったら銃殺する」と命じられながら、ドイツ空軍

のパイロットチームと試合をさせられたのです。けれどもディナモ・キエフは5対3でドイツチームを破りました。チームは直ちに収容所に連行され、反ナチス行為として3名の選手が射殺されたということです。この事件はウクライナ人の闘争心に火をつけ、地下での反ナチス・ドイツの抵抗運動を活発化させました。と、副団長で日本ユーラシア協会副理事長の児島宏子さんが解説してくれました。

私たち調査団は上述の説明を受けながら、バスでディナモサッカー場の周囲を巡りました。

キエフの歴史

ロシアとウクライナはかつて「キエフ・ルーシ」と呼ばれるひとつの国家でした。ロシアおよびウクライナに共通の神話に属する歴史書によれば、この地域に住んでいたスラブ系の民族に、キイ、シチェク、ホルフの3兄弟がおり、彼らが最初にキエフを建設したことになっています。首都キエフは長兄キイの名にちなんでいます。その後東スラブ民族を統一し、キエフルーシと呼ばれる国家の首都としてキエフは歴史に登場してきます。「ルーシ」は「ロシア」の語源でロシアの歴史はキエフから始まったと言えます。「ルーシ」の語源の最も有力な説では、北欧からキエフを統治するためにやって来たノルマン人一般を指す名称と考えられているそうです。

ドニエプル河畔にあるキエフ建国三英雄の像は、日本人が思い浮かべるヴァイキングの小船のように見えます。みなさん如何でしょうか。



写真13 ドニエプル河畔の
キエフ建国三英雄の像

キエフの1日・・・その2

キエフに到着した私たちはウクライナにホテルに荷を降ろし、食事に出かけました。地下鉄に乗るためには路上を歩いていると、駅前と思われる広場で奇声を発している集団に出会いました。周囲の商店街にはネオンサインも輝いていますが、夜のとばりも下りたので薄暗く何をしているのかよく分かりません。聞いたところによると、「クビを切られた労働者がハンストをしているのだ」といいます。食事から帰ってきたときには広場には10張りくらいのテントがたっていました。

路上や地下通路には花屋の店が目立ちます。キエフの地下鉄のエスカレーターは日本のものより急勾配で長いものでした。そのせいかスピードは相当速く、日本の3倍くらいにも感じられました。地下鉄は地下深くを走っているのでしょう。

放射線医学研究所

9月2日土曜日で、日本を離れてから7日目になります。今回の日程で最後の公式行事となった、放射線医学研究所の訪問です。その付属病院で二人の教授の説明と、三人の放射線被爆者の話を聞くことが出来ました。

この研究所は1986年10月に設立され、医療支援と医学的な放射性物質の除去が目的とのこと。日本の諸機関とも密接な関係をもって治療と研究をしているそうです。対象は リクビダートル 高濃度汚染地域にいた住民 30km圏内に舞戻って生活している人です。公式な報告ではチェルノブイリ原発事故での被爆者は250万人。その一部をこの研究所と病院で受入れているそうです。

リクビダートル : チェルノブイリ原発事故で、消火防災・放射性物質の封じ込め・汚染除去など事故対策に従事した労働者のこと。動員された軍隊も含む。当然ながらリクビダートルも被爆者です。旧ソ連全体で60万人とも80万人ともいわれています。

G教授の話 一番たいへんだったのは1986年から87年だった。ウクライナだけで22万人のリクビダートルがいた。第4原発が「石棺」に閉じ込められるまで大量の被爆があった。原発周辺の住民はすぐに疎開させられた。チェルノブイリで3万5千人、プリピャチで5万人、その他合計で9万6千人になる。心理的・社会的ストレスでの苦しんでいる人々は、十分に休息して解消するしか方法はない。

現在の課題は 子供たちの抱えている後遺症をどう克服していくか 医療支援をどのように拡大していくか である。

S教授の話 広島・長崎の原爆での被爆と、チェルノブイリの原発での被爆では違いがある。広島・長崎の被爆では急激で大量に生命を破壊した。チェルノブイリの被爆では長期にわたって人間と環境を破壊し続けている。この違いは放出した放射性物質性質、すなわち半減期の長さの違いによる。

第4原発では新たに第二の「石棺」が製作されているが、この作業にあたり2千人の労働者が被爆することは目に見えている。

Aさん(元リクビダートル)の話 現在70才の物理学者。シコタン島生まれ。

1986年の6月と9月の2回、それぞれ10日間程度滞在した。原子力発電所で何が起きているか何も知らされていなかった。リクビダートルに放射能の恐ろしさや、安全確保の仕方などの知識を教えるのが仕事だった。

86年の秋から体調不良を感じはじめた。とくに気管支系が悪化している。

Cさん(元リクビダートル)の話 当時33才で、事故当日から運転手として働く。

30km圏外に寝泊りしながら発電所へ食料を運んだ。15日間ずつ2回のべ30日間従事した。後から聞いたことだけど、宿泊地もけして安全な場所ではなかつたらしい。事故後毎年検査を受けているが、それまではどこも悪いところではなかつた。今は甲状腺と気管支がやられている。



写真14 チェルノブイリ生まれの青年と

Bさん(当時少年)の話 当時10才で現在30才の青年。父親は原発の労働者。

事故当時のことはよく覚えている。事故から4日目に母親と弟妹の4人でチェルノブを脱出し祖母の住む村に向つた。父はリクビダートルとして動員されていたので別行動だった。

16才の時に肺炎をわずらつた。気管支が一番やられている。父も母も体調を崩している。被害に対する補償は十分ではないと思っている。今はルノーの会社で働いている。

偶然かどうか分かりませんが、気管支が悪いのが3人に共通しているようです。

聖ソフィア大聖堂周辺

放射線医学研究所訪問の前後の短い時間でしたが、キエフ市内をバスで見てまわりました。

キエフはドニエプル川を境にして、高台側の歴史のある旧市街と平野側の新興市街に分かれています。平野側には高層ビルが建ち並んでいます。

当日は土曜日で、あちこちに結婚式を控えたカップルとその参加者の姿が目立ちます。教会で結婚式を終えたカップルはその後に必ず、ナチス・ドイツとの戦争での犠牲者慰霊碑や戦争勝利記念碑などを参拝してまわるのだそうです。



写真15 ムィハリフシキイ寺院

教会と言えばキエフで有名な教会にも行きでました。二つの大きな教会が300メートルほどの広場を隔ててそびえています。一方はウクライナ正教の総本山の聖ソフィア大聖堂で、もう一方はムィハリフシキイ寺院です。私たちは後の方を大雑把に見学しました。

モスクワへ

キエフでの日程を終えた私たち調査団は帰国のため、キエフ空港からモスクワへ向いました。出国の手続きは入国時よりはるかに楽に終わりました。モスクワまでの時間は、モスクワ～ミンスクとほぼ同じの1時間半でした。

モスクワにて

キエフからモスクワのシェレメチェボ第一空港に戻った私たち調査団は、旅の初日とは違って専用バスでモスクワの中心部に向かいました。森林を抜け工場地帯、住宅街と高層アパート群、商業街、公共施設と官庁街、ミンスクやキエフと同じような構成の町並みです。空港から30分でモスクワ川の畔にあるホテルに到着しました。

ウクライナホテル

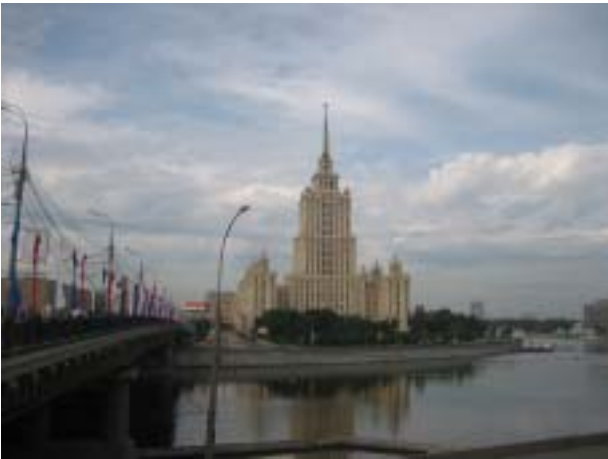


写真16 ウクライナホテルの外観

私たち調査団の泊ったのはウクライナという名のホテルで、前日のキエフでの宿泊と同じ名前のホテルです。モスクワには尖塔のある巨大な建造物が七つあり、このホテルはその一つだということです。なるほど今回の旅で私たち調査団が泊ったなかで最高の四つ星ホテルでした。飛行機の中で軽食をとりホテルに遅く着いたせいかな夜の夕食は無しということでした。しかし、皆のリクエストによりビュッフェで夕食ということになりました。日本でいうヴァイキングスタイルで学生の集団も来ています。夜食のせいかな一人約2500円の割には物足りない内容でした。

クレムリンと赤の広場

明けて9月3日は日曜で旅の最後の日です。午前中は自由行動です。私は中村敏夫さん(茨城県原発を考える会会長)とともに、ホテルでもらった観光マップを手にクレムリンに向かいました。およそ45分歩いて到着です。クレムリンもモスクワ川の畔にありました。

クレムリンは旧ソ連の時代も現在のロシアでも政治・経済の中核です。周囲約2.5kmで赤いレンガ状の高い城壁の中にありました。前庭が「赤の広場」で後広場が公園になっています。公園近くの城壁の傍には、ミンスクやキエフといった「英雄都市」の顕彰碑が並んでいます。クレムリンには入口が何ヶ所もあり、それぞれ多くの観光客が群がっています。制服の軍人や胸に数十個の勲章を付けた退役軍人のグループもいます。入門に時間が掛かり、しかも有料なので諦めて次を目指しました。

しばらく歩いてなだらかな坂を上ると広場が見えてきました。広場は石畳のようです。右手には赤い城壁がつづいていて、その中がクレムリンなのでしょう。城壁の手前にはやや小さな建物が見えます。これがレーニンのなきがらを安置しているレーニン廟だなど、すぐ分かりました。



写真17 クレムリンと赤の広場
(中央の小さい部分がレーニン廟)

これ以上の英会話が出来ないのと中村さんのビデオカメラを没収されたり盗られたりしたらたまらないので、レーニン廟の見学も断念しました。

「赤の広場」は本来のロシア語では「美しい広場」の意味だそうで、社会主義とは関係ないようです。普段は立入り禁止なのでしょうが、広場の中には人影はありません。旧ソ連時代の革命記念日には、兵士・戦車・大型ミサイルなどの華々しい軍事パレードが行われていたのを、テレビなどでよく見たものです。その印象から相当大きな広場なのだと思っていましたが、見た感じでは中学校の校庭くらいの広さではないかと感じました。(実際は73000㎡ = 2万2千坪とのこと)

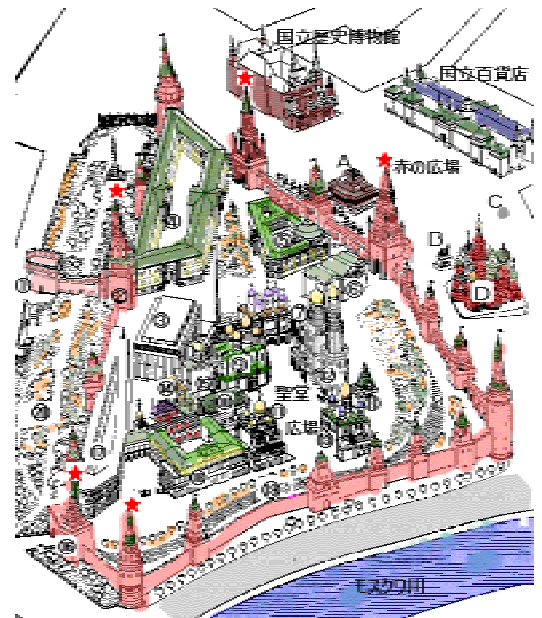


図3 クレムリンと赤の広場

入口の右側に多くの人々が並んでいるのでレーニン廟の見学コースだろうと考えて、私たちも列に加わりました。そのうちに腰に拳銃を下げた係員が「カメラはだめ」と言いながらやって来ました。中村さんがなぜダメかと聞くと「バッテリーが爆発する」と言っているようです。

広場の前方にはいくつものねぎ坊主の尖塔がある、豪勢な教会が見えます。この場所にあるということは極めて重要な教会なのでしょう。聖ワシリイ聖堂というそうです。広場の入口の左手には重厚でかなり大きな建物の国立博物館があります。その左前つまりレーン廟の対面に、現在も国立かは分かりませんがデパートになっています。



写真18 聖ワシリイ聖堂

帰国へ

あわただしくモスクワ市内の散策を終えた私たち調査団は、帰国の準備のためウクライナホテルに戻りました。身支度をして専用バスに乗り市内のレストランに立ち寄り遅い昼食をとりました。その後シェレメチェボ第一空港へ向いました。空港での待ち時間に、今回の調査の感想と報告書の作成について打ち合わせを行いました

入国と違って出国手続きはスムーズに出来ました。モスクワ時間午後7時(日本時間午前0時)過ぎ、日本から来たときと同じエアフロート機で成田へ出立しました。しばらくは深夜の中を東京へのフライトです。調査の全行程が強行だったせい、機内では比較的良好に寝られました。9月4日午前10時過ぎ、全員何事もなく成田へ到着しました。また暑い夏の日本の日常が戻ってきました。

おわりに

初回にも述べたことですが、チェルノブイリの原発事故の直接原因は原子炉そのものではなく、発電のためのタービンのテストであったことを知りました。その失敗が原発の大爆発事故に繋がったのです。爆発が住民と地域と環境に、放射線により大きな被害を与え続けています。現在も半径30km圏内には人々は立入れないのです。チェルノブイリの原発は廃炉になり、その動いていない原発を100年は管理しなければならなのです。原発は1度重大事故を起こしたらおしまい、最悪の環境破壊です。だから絶対に事故を起こしてはならないのです。

3年間ほど前から「原子力カルネッサンス」が、原発推進勢力により声高に叫ばれるようになりました。一昨年(07年)、IPCC(国連の気候変動に関する政府間パネル)はその報告書において、CO₂の削減策の一つに、原子力発電が有効であると報告しています。北海道洞爺湖サミットでも、原発推進をしのばせてました。

私たちはこれを鵜呑みにして良いのでしょうか。

一昨年の新潟県中越沖地震における、柏崎刈羽原発の被害は深刻なものです。いまだに運転再開の見通しはありません*。電力不足を避けるために火力発電を増強してCO2をまき散らしているのです。日本列島は世界有数の地震列島で、全国いたるところ巨大地震発生の可能性があります。しかも日本は地震発生の活動期にあるといえます。

日本の原子力発電の問題点についても記述しようと考えましたが私の力量に負えませんので、またの機会に譲りたいと思います。

(完)

お断り

本稿は日立市のミニコミ紙「日立金沢後援会ニュース」に連載したものに、加筆・修正を加えたものです。

また、図1「チェルノブイリ原発周辺図」、図2「ウクライナの所在図」と図3「クレムリンと赤の広場」

それに写真2「爆発直後のチェルノブイリ原発4号機」、写真13「ドニエプル河畔のキエフ建国三英雄の像」と写真17「クレムリンと赤の広場」は、インターネットサイトから流用したものです。

* 柏崎刈羽原発7号機は2009年5月、住民の不安を無視して運転再開が強行されました
(日本共産党茨城北部地区委員会ホームページ管理人)